

酒を聴き、歌を利き・・・

名誉きき酒師・音楽家 沢田知可子

名誉きき酒師としての役割

ある日本のソムリエがテイस्टィングの大会において優勝した時に、フランスのソムリエ協会の方から、「他国のお酒ばかり荒らさないで自国のお酒をもっと愛してあげたらいかがですか・・・」と皮肉まじり言われたのだそうです。その一言が大きなきっかけとなり、日本酒にもソムリエを育てようということできき酒師の制度を発足させる運びになったそうです。お酒によって日本人としてのアイデンティティーを考えさせられます。

「醸造」はライフサイエンスの原点であるそうです。

沢田知可子のバラードは生きるテンポから生まれる歌。

美しい日本語、言霊など・・・21世紀はココロの世紀と呼ばれます。それほどまでに、今を生きる人々に大切なココロのあり方、幸せのあり方を見つめ直す時代に入ったようです。

「音楽を利く・・・お酒を聴く・・・」、「きく」という同じ響きなのに漢字にすると、また味わいが変わるような気がいたします。そして音楽、お酒、どちらにも相応しく「酔いしれる・・・」という素敵な言霊があります。

皆様も、ココロとカラダで味わう「酔いしれる」感覚を体感されたご経験があるはずです。だからこそ、そのような歌をご紹介させて頂く意味が生まれるわけです。

お酒のうた、出会い・・・などについて。「恋の詩、うたって・・・」のお話など・・・

マリアーヂ

ワインとチーズの絶妙な組み合わせをマリアーージュと表現致しますが、お酒と音楽とのマリアーージュも豊かな心を育む素敵な関係だと思えます。

和テイストで表現するならば肴（酒菜）。酒席の興を添える歌舞や話題なども肴。

そこでココロとカラダに美しいオーガニックワインと生きるテンポ即ちスローライフに心地よいバラードとのマリアーージュをコンセプトに歌を作ってみました。

女性ソムリエールが「キューベ・マリー」に込めた思いから始まった話など・・・

華を持たせましょう・・・親子で酌み交わせる日を夢みる父親

黄色は敬意や尊敬など誠実なる感謝にふさわしい色はスマイルの色。

家族団らんの象徴でもある明るい食卓に、思わずココロが踊るメイジャー3拍子の歌。

父へ贈りたい感謝の黄色いバラと歌とワイン・・・。「R o s a A m a r i l l a」

「女の主演は食・・・男の主演は酒・・・。」

フランスの酒屋のお話を交えながら、組み合わせを大切にするお酒への価値観についてお話してみたいと思います。そして日本の食卓では・・・。

お酒は「独居の友」

昔から日本人は、お酒との上手な付き合い方を考えていたようです。

室町時代の狂言である餅酒では、お酒は「独居の友、万人和合す、位なくして貴人と交わる、推参に便あり、旅行に慈悲あり、延命の効あり、百薬の長、愁いを払う、労を助く、寒気に衣となる」といっています。

また、江戸時代の随筆を集めた百家説林では、柳沢淇園（きえん）が飲酒十徳として、「礼を正し、労をいとひ、憂をわすれ、鬱をひらき、気をめぐらし、病をさけ、毒を解し、人と親しみ、縁を結ひ、人壽を延ぶ」といっています。

どちらの飲酒十徳も、お酒にはストレス解消と抗うつ作用があることをいっています。更に、お酒は円滑なコミュニケーションを図ることが出来、心理的な効果があることを強調しているようです。

「酒はうれしいの玉箒（たまほうき）」

近松門左衛門の戯曲の中にも、「酒はうれしいの玉箒（たまほうき）」という名文句があります。

このように、日本では昔から和を重んじていたために、精神面の効果を特に強調していたのでしょう。日本の昔の人もストレスに悩んでいたのかもしれませんが。

末期ガンなど重病と言われている患者を鍼治療されている先生がいらっしゃいます。この先生が主宰する「アホだら会」は、病をわすれて酒を酌み交わしながらアホになりましょう・・・という患者さんのための飲み会というのも治療の一環であると推奨されています。

お酒とかけて夢ととく・・・そのココロは、生きるチカラです。

決してすぎるものでも逃げるものでもなく、つかず離れずの距離感を育んで行く関係かもしれません。

「gift」のお話をさせていただきます。かたちのない贈り物について・・・。

酒と泪と男と女・・・「カタルシス」と酒についてのお話。

涙と酒が似合う歌。

涙を流すことは魂の浄化です。

お酒でココロを解放して、悲しい歌を聴きながら涙を流すことはある意味「治療」なのです。L I V Eで聴く歌は特にその波動が届きやすいと言われております。

最後に・・・

泣くことさえ許されなかった時代の女詩人永瀬清子さんの詩をご紹介します。どうぞ。

「平和」を心から祈れる人間になるために・・・。

ありがとうございました。